



『ワニのガルド』大賞

遠くのひとみちゃんへ

3年 Y・Aさん

私が「ワニのガルド」を読んで、心にのこった言葉が二つあります。一目は「生きていてほしいとつくねる」ともだちがいて、ふかくなかよくなれたら、その人のいのちは、もう、百点満点なんだ」です。

もちろん、人は食べ物や水や空気があれば、人間だったころのガルドのように、一人だけで生きていくこともできます。でも、それだけだと何かが足りないのです。だから、ガルドは真つ暗なナイル川のほとりでワニに食べられて死ぬ時、とてもさびしかったのです。その心の中の足りない何かをつめるのが友達です。友達がいて初めて、命が百点満点になるのです。

それじゃあ、友達とはいっしょにいなければならぬのでしょか。その答えがもう一つの言葉「いっしょの中にさ、会いたいと思うだれかがいるってことはな、もう、ひとりじゃないってことなんだ」です。

私は小学校に入学する時に引っこしました。小学校では新しい友達もたくさんできました。新しい友達とはいっしょ仲良くすごしてい

ます。

それでも、私は遠くはなれたようち園のころの大好きな友達のことを思い出すことがあります。友達の名前はひとみちゃんです。夏の夜ゆかたの人を見ると、ようち園のぼんおどり大会にひとみちゃんと一しょに行ったことを思い出します。つめたい北風がふくと、落ち葉を拾って、工作の時間に二人でしおりを作ったことを思い出します。

そんな時、私はひとみちゃんにとても会いたくなって、手紙を書いたり、母にたのんでらんらくを取ってもらいます。長い休みの時にはひとみちゃんと会うこともあります。久しぶりに会ったひとみちゃんは「Yちゃん、会いたかったよ。いつもYちゃんのこと思い出していたんだよ。」と笑ってくれます。私が会いたいと思っていた時、ひとみちゃんも私に会いたいと思ってくれたのです。きっと、私とひとみちゃんの心がつながっていたのです。

心がつながっていれば、きよりはかん係ありません。一しょにいたくても、ひとみちゃんは大切な友達です。そこにいなくても、ヒナちゃんとアヤカちゃんがガルドのことを友達だと思っているように、私は遠くはなれたひとみちゃんのことを大切な友達だと思っているのです。